

湖水および農薬を用いた生物検定試験

岡村貴司・幡野真隆

◆背景・目的

琵琶湖の環境は排水の流入により様々な影響を受けている。特に、農業排水により、栄養塩の増加などの無機環境への負荷や魚類の忌避行動が生じるほか、残留農薬などの流入による生物への影響が懸念される。

本研究では生物検定試験を行い、天然水域の動向や残留農薬などの影響を把握することを目的とする。

◆成果の内容・特徴

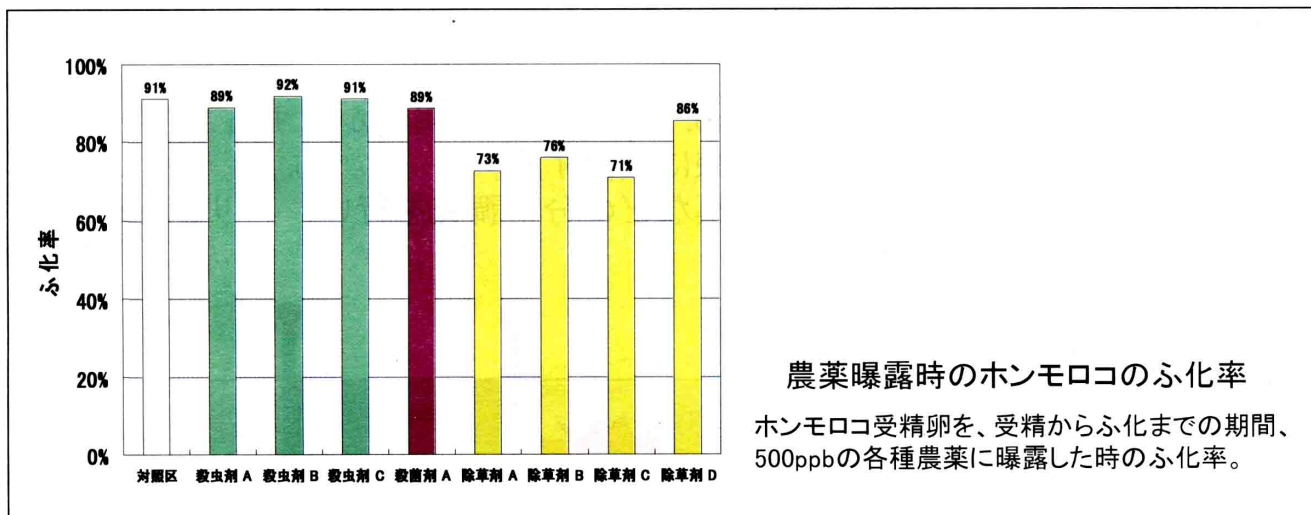
○生物検定試験(ホンモロコ、プランクトン：室内)

①ホンモロコ

- ・近江八幡市牧町の沿岸水でホンモロコをふ化させたところ、ふ化率の低下はみられなかった。
- ・県内に出荷されている農薬で、ホンモロコのふ化率を低下させる除草剤が存在した(濃度は500ppb[琵琶湖では検出されない濃度])。

②プランクトン

- ・近江八幡市牧町の沿岸水でセレナスツルムを培養したところ、5月上旬に増殖阻害が確認された。
- ・クラミドモナスおよびツボウムシでは、増殖阻害は確認されなかった。



◆成果の活用・留意点

- ・天然水域における農薬の動向の調査や、ホンモロコ等への影響を継続して確認する必要がある。